

Title	"白井さん"と私
Sub Title	
Author	平田, 敬(Hirata, Kei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.44, (1982. 12) ,p.364- 366
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	白井浩司教授記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00440001-0364">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00440001-0364</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

いた。そのような時には、先生はよく塾の先輩や後輩の方々に引き合わせて下さった。もう十数年も前のことから、お忘れになったかも知れないが、あるパーティーで石坂浩二さんを紹介して下さったのも、白井先生である。それから何日かして、ニッポン放送のSプロジェクトサーから電話があり、「朗読は、石坂浩二さんではいかがでしょう」と言う。この放送局で、「朝のグラビア」というプログラムをスタートさせようという企画があって、わたしにそれに毎回詩を書くことになっていたのである。先生にお引き合せいただいていたので、最初からこの作者と読み手の呼吸はぴったりとあってまことに楽しく仕事を続けることができた。その後、NHKの「夢のハーモニー」の特集番組でも、石坂さんに拙詩を読んでもらったが、先生にはどのようにお礼を申しあげていかかわらない。

白井先生は、時折、お電話を下さる。いつだったか、ジュリエット・グレコの歌ったサルトルのシャンソン「ブラン・マントオ街」のことでお電話いただいた時、

「これはそう急がないから……」と前置きされて、「レ・パピヨン・ド・ニュイというシャンソンの歌詞を知りたいのだが……」とおっしゃった。白井先生の宿題である。「急がないから」というおことばがあったので、こちらもものんびりと調べていたが、つい最近、それがジャック・ランティエという歌い手のレベルトゥールに入っていることを知った。「いくらそう急がないと言ったからと言っても、遅すぎるよ」とおっしゃるかも知れないが、近くその歌詞をお届けできると思う。

白井先生、ご退職の後も益々お健やかにお過ごし下さり、時には「そう急がないから」という宿題をお出し下さるのを、わたしは楽しみにお待ち申しあげる次第である。

（詩人・昭和二十七年仏文科卒）

## “白井さん”と私

平田 敬

生れついで頭の悪さのためか、私の記憶は常に断片

的で、脈略がない。

わが敬愛する『白井さん』、白井浩司先生についても、記憶の最初の断片は、小田急線経堂駅近くの小文化住宅である。確か御令兄の家に、御夫婦で居候しておられたのではなかったか。

戦前の中堅官吏が東京の郊外によく建てた、玄関の隣に六畳ぐらいの広さの、一部屋だけの洋館のついた家である。

白井さんはジャンパーにズボンで、(スラックスという語感とは縁遠い代物の時代です)黒足袋をはいていたのを憶えているのですから、肌寒い季節だったのでしょうか。

その一部屋だけの洋館で、私が生れて初めて書いた短編小説の評を伺った。賞められたのか、貶されたのかは、ズボンに黒足袋ほどには判然としない。多分、可もなく不可もなかったのでしょう。白井さんはいかにも若く、瘦身長軀の体の動きが、しなやかだった。私はまた小僧ッ子で、原稿用紙もまだ仙花紙まがいの、ザラザラ

と手ざわりの悪い時代の筈である。

後年、民間放送局にいた私が、三十過ぎてからまた小説を書き出してからのある夜、銀座のバーで、「作家としての君を水揚げしたのは、ぼくだ」と白井さんから言われた時に、私もまた経堂の家の、いかにも戦前からの小住宅らしいいたずまいを、私の青春の一駒として、息を止めるような懐しさで振り返った。

二番目の記憶も同じ頃、白井さんの最初の渡仏である。送別のパーティもあった気がするのだが、記憶として残っているのは、羽田空港の送迎用のデッキである。

公費留学の資格を得られなかった白井さんが、外務省か文化庁だかに提出されたフランス語の論文について、「私のフランス語を正當に審査できる人がいるのか」というクレームをつけたという伝説に包まれての私費留学だったが、その伝説は、白井さんを敬愛する弟子の私たちの創作だったかも知れない。

ともあれ、羽田空港へ見送りに行った私の隣に、同じフランス文学科の先輩である田久保英夫さんがおられ

た。離陸する旅客機を見ながら、田久保さんが、「平田君、きみもいつかは、フランスへ行きたいでしょう」と言われたので、私はひどく驚いた。フランス文学についても怠け者の私は、田久保さんが言われるような留学という意味でフランスへ行きたいなどとは、毛頭考えていなかったのである。

それだけに、そうした出来の悪い学生の一人にすぎない私が、なぜ白井さんだけには個人的な親しさを感じているのかを、この時改めて考え、そのためにこの時の記憶がいつまでも私のなかに残ってしまった。

講義にはろくすっぽ出ない、ろくなりポートも書かない私が、他の諸教授を煙たがりながらも、白井さんにだけは心易く雑談をしかけ、酒場へのお伴を願ひ出たりしたのか。

この理由は、今でもわからない。怠け者の学生だった時に、「君はいずれ小説を書くか、ジャーナリストになる人で、文学部を出て銀行員になる学生ではないでしょ。それなら、遊びがおもしろいうちは、遊んでいなさい」

とおおらかに扱って頂いたから、などという卑俗な理由では勿論ない。

だが、理由がわからないままに、出版社や三田関係のパーティで白井さんの長身を見出す度に、私は近況雑事とりまぜて話しかけ、二次会のお伴になっているのである。したがって、ここから先の白井さんについての私の記憶の断片は、ホテルやレストランのパーティや、銀座、新宿、六本木の酒場が背景になっている。

そして、そうした記憶については、私は今書きたくない。というのは、二年ほど前から私はハワイに住んでいて、パーティで白井さんにおめにかかる縁が、ばったり杜絶えているからなのである。御縁が中断しているだけに、再開されるまでは大事に藏っておきたい。白井さんが白井浩司先生としての、教壇を去られる記念のパーティにも、できれば是非出席したいと思ひながら、熱帯圏の小島から遙か三田山上を遠望しているのである。

(作家・昭和二十九年仏文科卒)